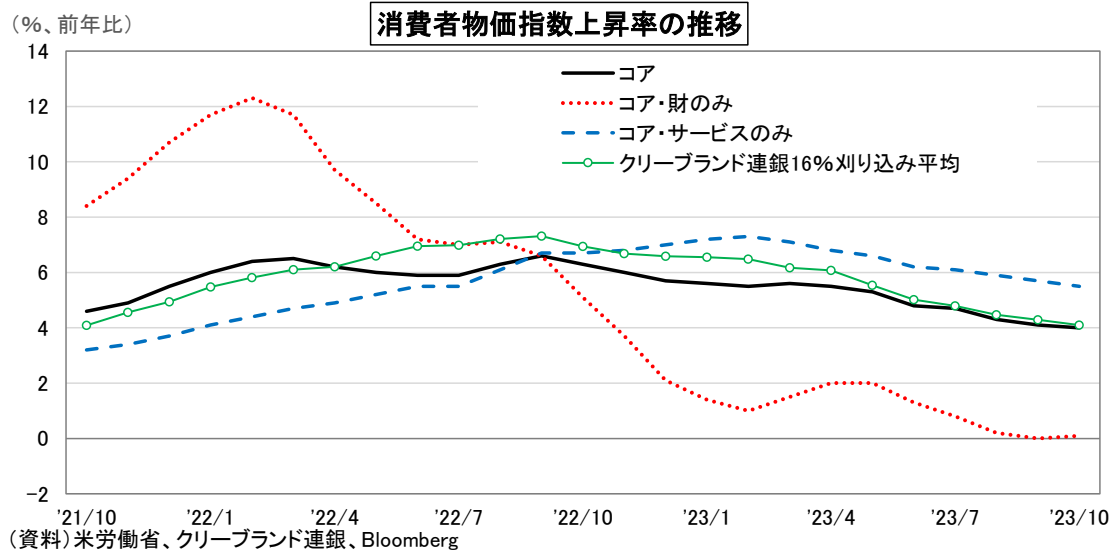


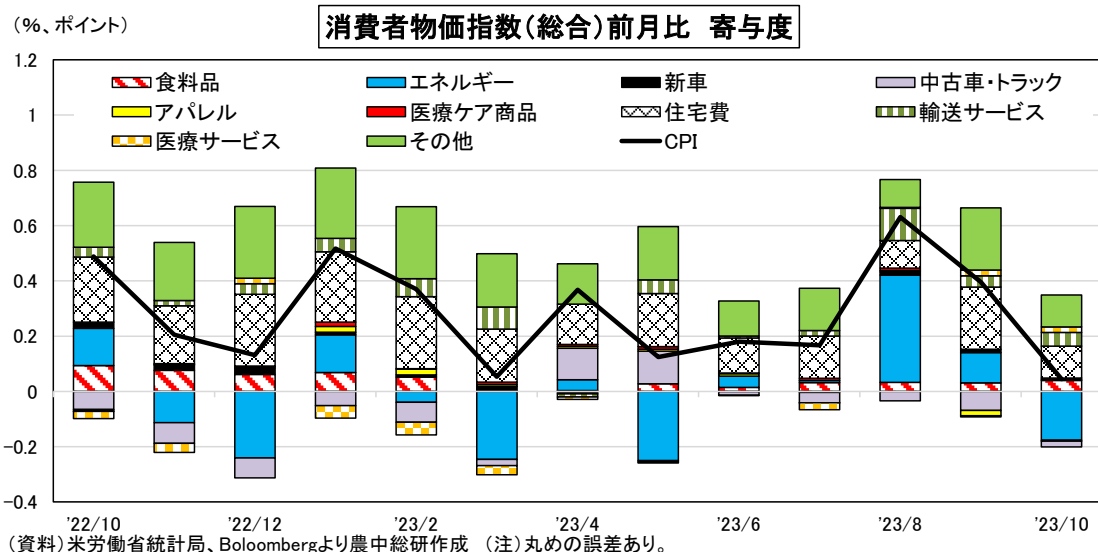
(米国)利上げ終了の手がかりとなった 10 月 CPI

10 月の消費者物価指数(CPI)を確認すると、総合は前年比 3.2%(前月比は 0.0%)、食料とエネルギーを除くコアは同 4.0%(同 0.2%)となった。コア CPI は前月比 0.2%と再び鈍化し、FRB の物価目標とおおむね整合的な値となった。前年比では 4.0%と依然として高止まっているものの、鈍化傾向は維持されていると判断できる。

コアの内訳を前年比でみると財とサービスで状況が異なり、財は同 0%まで鈍化して安定している一方で、サービスは同 5%後半と下げ渋っている。

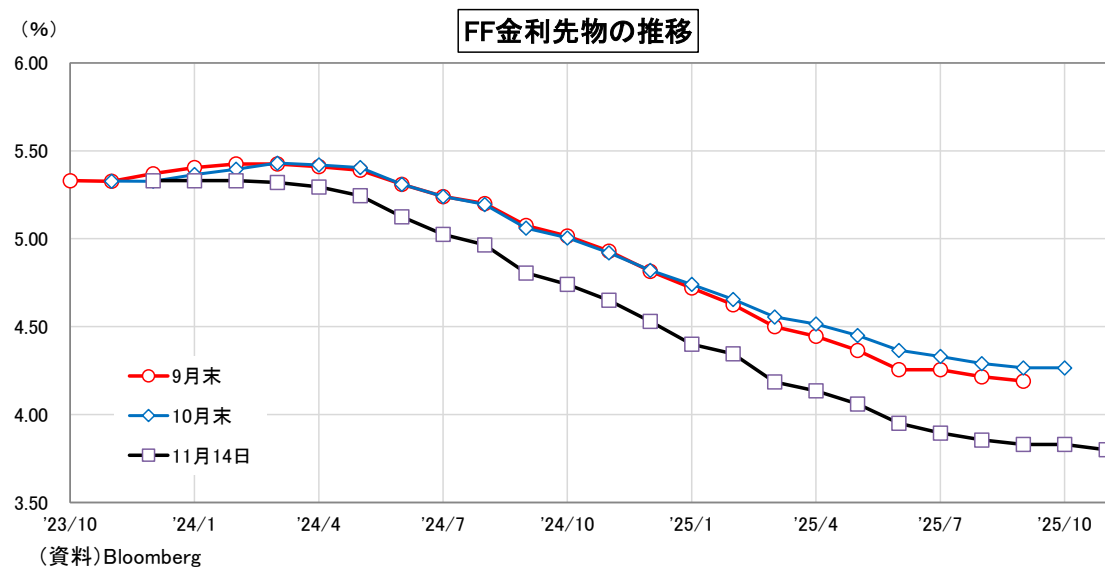


前月比で計った CPI 総合に対する寄与度をみると、10 月は輸送・サービスと住宅費のプラス寄与が大きく、エネルギーのマイナス寄与が▲0.18 ポイントと大きかった。



金融政策との関係では、10月CPIからは追加利上げの必要性がほぼ無くなったことが読み取れる。インフレ率は8、9月にやや上振れていたものの、10月CPIからは、(PCEデフレーターで計った)2%物価目標と整合的なペースへと足元のインフレ率が再び鈍化したことがうかがえる。このため、次回の12月FOMC(12月12～13日)では利上げが見送られる可能性が非常に高そうだ。

また、FOMC後に公表される経済見通しなどから、24年以降の利下げペースを考えることとなるだろう。ちなみに、11月14日のFF金利先物では、24年半ばからの利下げが織り込まれており、24年内の利下げ幅は1ポイント程度と予想されているようだ。



需給がひっ迫している労働市場を反映して、コア・サービスのインフレ率が高止まっているため、インフレ率が2%物価目標まで順調に鈍化し続けるかについては判断が分かれそう。この点について、FRBがどのように考えて見通しに反映させるかも注目材料と思われる。